

1月号パラパニュース

特定非営利活動法人日本パラ・パワーリフティング連盟

事務局：〒107-0052 東京都港区赤坂1-2-2-4F

電話：03-6229-5423、FAX：03-6229-5420

メール：jppf.jimu@gmail.com

ホームページ：<http://jppf.jp/>

□ 東京パラ資格取得 ラストチャンス、コロンビ ア・ボゴタアメリカ選手 権大会

写真：西岡浩記



開会式の行進を待つ石原選手と、今福トレーナー

東京パラリンピックに参加するには、本年12/5までに、クラス分けを受け、地域選手権に出場すること、と言う条件が、IPCからだされ、特に女子選手を派遣せよ、との事で、急遽女子選手を募集することになった。

連盟では、初心者からベテランまで、出来るだけ多くの選手に東京パラ参加権利を獲得してもらいたい、というのが、本年の目標であったので、大変急な話ではあったが、新人女子を含め、選手12名、役員4名の日本選手団を12/6-9、ボゴタに派遣した。そのような特殊事情から、通常は考えられないことだが女子選手の中には、初のパラパワーの試合が海外！という選手もあり、石田直章日本選手団監督、東前めぐみスタッフ、今福トレーナー、土居トレーナーには、大変な苦勞をおかけすることになった。また、コロンビアは標高3600mを超え、選手の中には、体調を崩す者もでたが、今回の日本チームスタッフの皆さんには大変お世話になり、無事に大会を終えることが出来た。

コロンビアに入国するに当たり、パラリンピックサポートセンターのご尽力を頂き、在日コロンビア大使館を訪問し、コロンビアでの日本選手団の滞在に何かと便宜を図っていただいた。

(写真上)

□ ボゴタ学校訪問



選手有志で参加した現地コロンビアの日本人学校訪問では、大変な歓迎を受け、コロンビア在住の日本の小学生の皆さんと交流を深めた。

コロンビアでは、家では日本語、学校では英語、遊ぶときはスペイン語を話し、小学生にして、既にトリリンガルであるとのことだった。

ブラジルのリオでも感じたが、南アメリカは、スペイン語、ポルトガル語が主な言語で、英語はあまり通じない国々であった。

生徒さんたちは、学校を終えてから、選手の応援に会場まで来て、大きな声援と拍手を送ってくださった。日本選手には、これは、とても、大きな励みとなった。

山本恵理さんが、試合前に「どらやき」を食べると元気になると、発言されると、翌日、どら焼きの差し入れがあった。よくぞ、コロンビアで！と、言うとお母さん達の手作りの「どらやき」だとのことだった。日本から離れていると、何でも手に入ると言うわけには行かず、必然的に、皆さんで、様々なものを手作りしていると、言っておられた。遠く離れたコロンビアの地で、日本の方たちがお互いに協力し合いながら生きておられる様子が伝わってくる。



ボゴタ日本人学校の皆さんと、パラパワー選手。



□ 女子

45kg級

中嶋明子

記録無し

失格

□ 女子55kg級

マクドナルド

山本恵理

53 kg、6 位



□ 女子55kg級

中村 光

記録無し

失格





□ **女子61kg級**

龍川 崇子 (写真左上)

47kg、5位

□ **女子61kg級**

輕森 亜希 (写真右上)

記録無し、失格

□ **女子67kg級**

水江 加奈子 (写真右)

51kg、5位





■ 男子49kg級

松本 崇

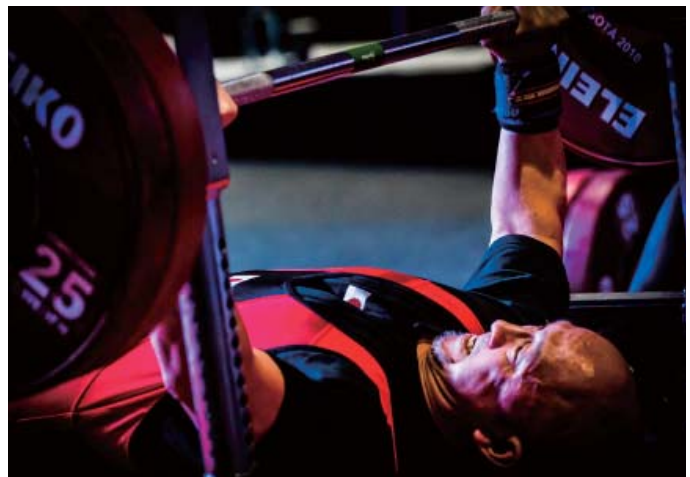
80 kg、8 位



■ 男子65kg級

城 隆志

125 kg、7 位



■ 男子

65kg級

森井 大輝

125 kg

8 位



男子80kg級
野沢 哲也
125 kg
7 位

男子88kg級
石原 正治
140 kg
7 位



男子97kg級
佐藤 和人
146 kg
8 位

こうして、2018年度の全試合日程は終了した。その結果、本年度の連盟の目標であった出来るだけ多くの選手に東京パラリンピックへの最低限の道筋を獲得して欲しい、という結果は；

女子 10名

男子 27名

の選手が最低限の道筋を獲得した。

この後の大きな関門は、「世界選手権」。この日本代表権獲得が、これから、半年後の7月まで各選手の大きな課題となり、明暗の分かれるキー大会。

この合計37名のうち、だれが世界大会にいけるか、行けないか。ここが、東京パラリンピックへの道筋を獲得した選手、出来なかった選手の大きなターニングポイントとなる。ただし、たとえ東京パラへの道が開けなかったとしても、東京パラ終了後約4ヶ月で、もう、次のパリパラリンピックへのパスウェイ（道筋）が始まる。

パラパワーリフティングは、試合ごとの積み重ねで実力をつけ、何年もかけて、基礎筋力を養成し、その上に立つ最大筋力を発揮する競技だ。一つのお祭り（東京パラ）の後には、次のお祭り（パリパラ）が待っている。

パラパワーに志を見出された選手に於かれましては、「筋肉は裏切らない」ことを理解し、基礎をつけ、土台のうに立つ華やかな祭典での活躍を信じ、絶えず前進していただきたいと心より、願いたい。（事務局吉田寿子）



アメリカ選手権に参加した選手と応援に駆けつけてくれた在コロンビアの皆さん

パラスポーツの魅力語る

城陽で報告会 選手や伴走者ら



障害者スポーツ活動

自身の体験や障害者スポーツへの思いを語るパラアスリートや伴走者ら(城陽市寺田・文化パルク城陽)

の3人が話した。

脊髄炎から車いす生活になったという阪根さんは「子どもたちがスポーツを通して障害者を知り、困っている人に声をかけられるようになってほしい」と引退後に講演活動に注力する理由を語った。

日野さんは、けがもあり自身の競技生活が行き詰まっていた時、近藤さんと出会ったと自己紹介。大学院でも伴走者に関する研究をしており、「リオで感じたパラスポーツの魅力を多くの人に伝えたい」と強調した。

森崎さんはパワーリフティングの魅力を「競技台に寝てから、

選手権で好成績を残すことを目標に掲げた。同日に開かれた城陽福祉ふれあいまつりの一環で、府立心身障害者福祉センターとNPO法人「京都スポーツ・障がい者スポーツ推進協会」が初めて企画した。(中西英明)

0. 1/26 京都新聞

文化パルク城陽で

「パラスポーツ活動報告会」を開催した記事です。

福祉ふれあいまつりの一環としてパラスポーツのPR
なので初めての企画

